

幼児理解を深めるためのカンファレンスの検討 — 保育実践の一場面のカンファレンスの省察から —

Revaluation of Conferences on the Study of Pre-school Children: Reflections on a Childcare Practice Case

(2011年3月31日受理)

平松 美由紀
Miyuki Hiramatsu

Key words : 幼児理解, カンファレンス

要 旨

近年、保育者の役割はその重要性を増している。保育所や幼稚園には子育て支援の機能が求められ「発達や学びの連続性をふまえた幼児教育」(文部科学省「幼児教育振興アクションプログラム」)の担い手として、一人一人の発達を見通した保育を行う専門職としての資質の向上は期待されている。そこで、保育実践の場面で保育者がどのように幼児の内面を理解しているか、その方法としてのカンファレンスに視点を置き省察を行うこととした。また、実際のカンファレンスの中で保育者自身にどのような変容がみられるか、実践事例のカンファレンスでの保育者自身の気づきからの自己向上への認識について検討を行った。

1 はじめに

幼児教育に携わる保育者は、日々の保育実践を脳裏に焼き付け幼児の発達を支えるための「幼児理解」に努めている。そして、その「幼児理解」を深めていく方法として「保育カンファレンス」を取り入れていく保育所・幼稚園は現在ほとんどであるといっても過言ではない。それと共に、幼児の適切な発達を支える保育者の資質向上が問われている今、平山はこの方法は専門性を高めるためには有効であり、保育カンファレンスにおける同僚、他園の保育者との会話から自分自身の保育にある課題に気づくためにも有効であると明らかにしている。では、実際の保育カンファレンスで保育者がどのように幼児理解を深め、専門職としての資質向上を自覚しているかについて検討していきたい。

2 保育カンファレンスとは

保育所・幼稚園では日々の生活の中で何の疑問もなく「保育カンファレンス」が行われている。しかし、どのような方法で何について何がなされているかについて整理してみることにする。

まず、保育カンファレンスは、現職保育者が事例の検討を他者と共に行い、学び合おうとする保育者の力量形成を図るものである。実際には保育事例(エピソードや保育記録)、保育実践後に、「話し合い」や「事例検討」など様々な形式で行われている。

保育カンファレンスという概念は、臨床医学や臨床相談のカンファレンスの考え方・手法を保育に取り入れたものである。もともと医師や看護師、カウンセラー、ケースワーカーなどが臨床事例に基づき、それぞれの把握している状況、判断を出し合い対象者への対応を検討するとともに、その過程を通して専門性を高めていく営みを示す言葉であり、その後教育分野において教育学研

究者の稲垣忠彦によって『授業カンファレンス』として提唱された。稲垣は医学や臨床心理学分野においてカンファレンスの概念に、アメリカの教育学者アイズナー (Eisner, N.) の「教育鑑賞と教育批評の融合」という考えを付け加えて修正し、授業カンファレンスを通じた事例研究は「決して模範となる授業を求める研究ではないとする。そして正解を求めるのではなく、多様な見方・捉え方の交流において複雑で奥行きのある授業の理解を深めることである」とした。稲垣によって提唱されたカンファレンスは、更に森上史郎によって保育界に応用された⁴⁾。森上は保育の現場で行われる保育についての話し合いを、1980年代にいち早く「保育カンファレンス」というものを構想し、1989年以降に実践を試み始めた。

保育カンファレンスの意味として、「他者の見方に触れる中で、マンネリ化しやすい自分の保育実践をもう一度自覚させられ、自分の保育の向上をさせる」など、自分の保育を改めて省みる機会として、よりよい実践を目指して行われるものであるとされてきた。では、自分自身への振り返りとは、どのようなものであるかについて考えていきたい。

保育実践を振り返ることに關しては、「省察」という概念を用いて説明されることが多くある。中でも秋田喜代美は、D. ショーンの「反省的実践家 (reflective practitioner=省察的実践者)」の考えから、3つの振り返りの行為があると述べている。「いかにうまくいったか、うまくいかなかったかを考える (技術的省察) だけでなく、その子ども、子どもたち、保育者にとって、その遊びや活動はどのような意味があったかを考え (実践的省察)、また、さらになぜ今その活動、その方法なのかと『なぜ』を考えてみる (批判的省察)」ことである。

ショーンは1980年代に「省察的実践 (reflective practice)」、 「省察的実践者 (reflective practitioner)」の概念を示し、その後、教師教育の分野で「省察的実践者」としての教師についても言及している。ショーンの言う「省察的実践者」とは、技術的な向上に基づく経験からの熟達者とは異なり、「行動・行為の中の省察」を通して課題解決に取り組む実践者を指している。

ショーンの示すことを踏まえて、秋田の考えを解釈するならば、「なぜ今その活動、その方法なのかと『なぜ』を考えてみる (批判的省察) こと」とは、「なぜ、保育

者自身がそう判断したのか」という、行為を読み取る中で、保育者の脳裏でなされている状況の理解や認識 (「行動・行為の中の省察」) を再確認することとも言える。つまり、保育カンファレンスは保育者にとって「複雑であいまいで多様な保育と、そこで暗黙のうちになされている省察を言語化し、自分自身の保育の在り方について考え、振り返る場となるのである。

3 研究方法 (保育カンファレンスの実際より)

まず、保育カンファレンスには様々な形態があることを述べておく。1980年代末以降、現場にて行われてきている「保育カンファレンス」は主としてグループカンファレンスのことを示している。グループカンファレンスもさらに①実践後に行われるカンファレンス、②保育実践の場で行うカンファレンス (園内で行う研究保育に伴うもの、日常の保育にかかわるもの) に分類される。ここでの保育カンファレンスは②に示す園内で日常の保育にかかわり、継続的に行われてきたカンファレンスを示すものである。

(1) 保育カンファレンスの実際

ここではA幼稚園で2年間にわたり、保育実践の場面からのカンファレンスの記録をもとに次の視点からの検討を行うこととする。

視点①・保育者が自分の幼児理解を参加者に示すことで、「幼児を理解すること」について省察しているか。

視点②・他者の考えから、保育者が自分自身の保育をどのように振り返っているか。

文頭で示した保育カンファレンスで「保育者がどのように幼児理解を深めているか」という点について視点①、「専門職としての資質向上を自覚しているか」という点について視点②とした。

視点①ではカンファレンスの実際のカンファレンス記録から「幼児の内面について」に着目し、視点②では「自分の保育の振り返り」について着目し整理した。

(2) 保育カンファレンスの記録より

保育カンファレンスの時間：保育終了後 1時間半
保育者A：5歳児クラス担当 (保育経験20年)

保育者B：4歳児クラス担当（保育経験14年）

保育者C：5歳児クラス担当（保育経験3年）

保育者D：4歳児クラス担当（保育経験7年）

園長：（保育経験27年）

事例1 「幼児の内面を読み取るには」

<A子の言葉から>

(H17, 10)

保育者A：今日のお店屋さんごっこの場でBくんが「みんなのレストラン！ケーキとアメをみんなのためにた〜くさん売るんじや」って言った時、Aちゃんが黙って見ていたでしょ。その時は、Aちゃんがお店やさんやりたいんだって思ったの。

保育者B：でも、その後つぶやいた「私のケーキ…」って言葉、私「あ…Aちゃん違うかも」って思った。

保育者A：そう…つぶやくまでは一緒にかかわってくれたらって思っていたの。「じっと見ている」行動の裏にあるAちゃんの気持ち①を、私の願いで解釈してたのかな②。

保育者C：その前にも他の子どもたちがレストラン名前を考えていた時、Aちゃんじっと見ていたでしょ。私も入りたいたらと…。

保育者B：Aちゃんってじっと見ている時の視線が、いろいろなんですよ。

保育者D：先生、いろいろってどんな感じなの？

保育者B：自分がとことん遊びたい時は、視線が集中してるっていうか…

園長：あちこちの遊びに目がいかないってこと？

保育者A：好きなことしている時のAちゃん、呼んでも向いてくれないわ③。

（全員：笑 賛同）

保育者C：Aちゃん、そう言えば一緒に遊びたい時「ニタ〜ッ」って目をしている時ある。

保育者A：わかる！④

保育者D：いろいろって目力のことかな？

保育者B：あ〜そんな感じ。集中している時って大人でも視線がしっかりしていて、意欲を感じるでしょ。やる気っていうか。子どももそうだと思う。

保育者C：それって私たちが同じ視線で遊んでないと感じられないとこですよ。

保育者A：そうだね…同じ空気やその時の気持ちを

同じ感覚で感じてないと⑤…

保育者B：でもただ遊ぶだけじゃなくて、Aちゃんに今これを感じて！って思って関わるもんね。

園長：そうだね、私たちは「その場に共に生きる人」であること必要だからね。

事例2 「保育者の役割について」

<ありのままの自分を…>

(H18, 7)

B保育者：私は今まで何となく枠を作って話していた気がする。

（と保育場面のカンファレンスを行っていると突然B保育者が口にした。

A保育者：えっ？どういうこと？

B保育者：こうして保育の話をする時って、今はものすごく楽しい。でも、前は口を開くのも嫌だった時期がある…

園長：先生が3年目ぐらいの頃だね。

B保育者：そうです…園長先生、お気づきだったんですか？

園長：市内での会議の時とか、ずっと下を向いていたからね。居心地悪いなって感じてたわ。

C保育者：で、今はそうじゃないんです？

B保育者：ええ…保育をするのはみんな同じ。役職はあるけど、子どもたちにとってはみんな「先生」じゃないですか。その気持ちをもつことができるようになったのは、こうして小さな事を同じ土俵で話せること、否定的じゃない雰囲気かなと思っ

て。
A保育者：否定的じゃないって大事だよ。意見を言うことが自分を否定されてるって捉えられると「違う考えもってること」がダメなの？と思う…

D保育者：何も言えなくなります…

A保育者：「保育を語る」って自分をさらけ出すってことだよ。

B保育者：あ〜そうですね。「今までの自分」を出すっていうこと？ですかね。それを否定的に捉えられると「今までの自分ってダメなのか」って思ってしまうから…

写真1



〈考察〉

事例1はお店屋さんごっこの場面でA児が作ったケーキをB児がお店で売る物として捉え、A児の内面とのズレが生じた場面についてのカンファレンスである。このカンファレンスで保育者AはA児がつぶやくまで、A児の内面に気づくことができず、自分の願いのみで解釈してしまったことを振り返っている。またB保育者の「じっと見ている目線がいろいろ〜」という問題提起で幼児の内面を理解する方策として「A児の目線」についての議論となった。

幼児の実際の目線を「集中してるっていうか…」と明確にはなく何となく捉えているB保育者の発言がそれぞれの保育者自身の「目線の捉え方」を改めて考え直す機会へと展開されていった。保育者の「感覚で幼児を理解する（あいまいな保育）」特徴が、このカンファレンスにおいて『幼児と同じ目線で遊ぶ保育者』であることち『同じ空気、気持ちを感じる』ことが「幼児の行動を理解すること」へ大きく影響していることをA保育者自身が自分を振り返りながら明らかにしつつある場面である。

このように、毎日園で起こる些細な場面や幼児の行動に対し、保育カンファレンスを行うことで保育者がより省察的な保育場面の見方を行うことができるようになり、客観的に自分自身の保育を振り返ることで、省察的実践家へ近づいていくとも言えよう。A保育者は自分のありのままの幼児への気持ちを言葉とし、グループカンファレンスで提案した。そのことにより、A保育者

自身が自分の保育観に正面から向き合うこととなり「今までの私」に気づき振り返り、他の保育者の考え方、見方に触れることで「新たな私」へと変容していく保育者の意識の変化が起きている。これは、同じ場に参加した保育者自身にも変化が起きており、相互的に実践者としての自分を振り返っている場合がある。

また事例②ではB保育者の発言により、カンファレンスの基本的姿勢や条件について考え合う場面となった。保育カンファレンスは形態によっては、個人に攻撃的になったり、参加者の発言がなく話し合いにならなかったり、有効に実施されないことが多く見られる。相互学習の場とした保育者集団の様相がありのままに記述されている記録である。このように園内の全員でのカンファレンスを行うことは、他者との相互作用から、今私たちの保育の要点として大切にしたいと思っている「共に同じ頂点を目指す保育」が明らかになっていくのである。そして、メンバーそれぞれが自分の役割を果たそうとし、協力し合う意識の芽生えとなってくるであろう。グループの協働性が高まり、個々のメンバーのもつ要素（知識や情報など）を共有し、今まで以上の保育効果を示すことができるのである。保育カンファレンスを行うには、参加者が経験や立場に関係なく、自由に協議することが推奨されてきている。しかし、むしろ参加者がそれぞれの保育経験や立場を自己認識しつつ、真摯に保育実践を検討する姿勢が有効な保育カンファレンスの実施に必要であると考えられる。

写真2



4 終わりに

究16(3)18-29

(7) 秋田喜代美「保育者の専門的成長」有斐閣183

本稿では保育実践の場でより密着した園内での保育カンファレンスを事例をとして取り上げ、保育カンファレンスでの幼児理解と保育者自身の振り返りによる資質向上への意識を考察した。

カンファレンスが特定のねらいを設定して行われる場面もあると思われるが、日々の保育実践の中では保育者自身のニーズに沿って展開するグループカンファレンスが行われることにより、個々の保育者の主体的な参加や事例検討において対等性や主体性が発揮されるためには有効であることが示唆された。特に事例1では保育のあいまいな部分について再確認することの意味を保育者自身が気づき、自分を振り返ることで、より主体的な省察へと導かれつつあると言えるであろう。

保育者の自分の理解が進む保育カンファレンスは簡単なことではない。ややもすると保育者の経験に基づく既成の枠組みや理論にとらわれてしまう場合もある。しかし、参加しているメンバーが個々の保育者の発言を丁寧に聴き取り、「何を議論するか」を明確にすることで、幼児の内面の変化に気づき、その内面に寄り沿う幼児理解に基づく保育実践の枠組みを組み立てていくことができるであろう。

今後も幼児理解の重要性、よりよい保育実践の在り方、実践と理論の関係性についてカンファレンス記録や実践記録をもとに探り、検討していきたい。

参 考 文 献

- (1) 平山園子「保育カンファレンスの有効性」保育研究16(3) 18-29
- (2) アイスナーは、教育は量的評価になじまず、芸術的評価の方法を用いた「教育批評」を評価の手法とすべきだと主張した。
- (3) 稲垣忠彦「教師教育の創造」評論社186-187
- (4) 森上史郎「よりよい実践研究のために」ミネルヴァ書房244-250
- (5) 森上史郎「カンファレンスによって保育をひらく」ミネルヴァ書房3
- (6) 平山園子「保育カンファレンスの有効性」保育研

